



巻頭インタビュー

江北図書館 館長 久保寺容子さんに聞く

くぼでら ひろこ

湖北木之本に、私立図書館として、滋賀県内最古で全国でも3番目に古い図書館があるのをご存知でしょうか。その名は「江北図書館」。今回は、4年前からこの図書館の館長を務める久保寺容子さんを訪ね、地域に根付いた図書館、そして本という文化の大切さについてお話をいただきました。

聞き手：加藤 賢治[近江学研究所 副所長/成安造形大学 教授]

地域に根付いた図書館のあるべき姿をその時、体感しました。

■ まずは、久保寺さんのご紹介をお願いします。

私は、湖北長浜の高月町出身で、学生の頃は京都に出たことがあります。それ以降は、現長浜市を中心に活動してきました。子どもの頃から本が大好きで、一旦は長浜の旧市街地に就職しましたが、その思いは強く、ある時、ふと「4月30日は図書館記念日」という文字に目が止まり、4月30日が私の誕生日であることも重なって、やはり本に関わる仕事をしたいと一念発起。図書館司書の資格を取得するために学校に通い始めました。資格を取得したのは、私が38歳の時で、近江町にあった図書館でボランティアの仕事から始めました。

その後、長浜城歴史博物館や、高月町の高月観音の里歴史民俗資料館などに勤務し、学芸員という仕事の魅力にも惹かれ、この時に、本だけでなく、歴史資料や歴史的価値のあるモノの魅力にも興味を持ち始めました。そして、2014年、江北図書館と出会いました。

■ 久保寺さんにとって江北図書館とはどのような存在だったのでしょうか。

「こんな面白い図書館と出会ったことはない」というのが私の第一印象でした。ご近所のおじいさん、おばあさんたちが、採れたての野菜を持ってきて、ひとしきりお話をし、帰られます。たわいの無い日常会話や本の話。図書館は本来、静かな空間ですが、ここは、良い雰囲気があるコミュニティの場であるのだと理解しました。

ある時、「この図書館があってよかった」とおっしゃるおばあさまがおられ、話を聞くと、「昔の女性は、ほとんどを自分の家、そして家があるこの地域で過ごすのです。国鉄(当時)の駅が、こんなに近くにあるのに汽車に乗ったことがない。そんな暮らしの中で、私は、江北図書館で日本国内や世界の国が紹介されている本を読んで、行った気になって心が救われました」と話され、地域に根付いた図書

館のあるべき姿をその時、体感しました。

■ 館長になられてから、心掛けておられること、そしてこれからについてお話しいただけますか。

私が館長になったのは、2021年の10月です。長らく財団法人江北図書館の理事長、館長を務めてこられた滋賀大学名誉教授の富田光彦氏(祖父は私財を投入して江北図書館の危機を救った富田八郎氏)の勧めもあり、新しい理事のメンバーと共に、みんなでこれからの江北図書館をつくっていきましょうという考え方にも共感しました。

また私は、この図書館の古びた空間だからこそ、古い本が喜んでいると思っています。昭和時代の子どものための文学全集や図鑑などは、その時代を映し出す貴重な資料であると思っています。

江北図書館は、この木之本に無くてはならない素晴らしい場所であることは間違いないのですが、運営資金の不足から、細々したことも含め、課題は満載です。「デメリットをメリットに変えていきましょう!」を合言葉に、新しい理事や関係者の皆さんたちと共に、さまざまな取り組みを進めてきました。私たちが最も力を入れたのは、2022年、



江北図書館

図書館前にカフェとフリースペースを同居させたコミュニティスペースの設置をクラウドファンディングによって完成させたことです。その結果として、図書館周辺に集まる人々の年代、いわゆる客層が大きく変わりました。これまで江北図書館を知らなかった人たちに知っていただくことができ、これは本当に大きな成果だと思っています。

将来的には、図書館内に編集室をつくって、興味のある若い学生さんたちと一緒に、ZINE(自主的に非営利で発行する情報発信出版物)を発刊するなどして、図書館の存在価値を高めていきたいと思っています。これからも私設図書館の特徴を活かしながら、この町の本の入り口であり続けたいと思っています。ご支援をよろしくお願いいたします。

私自身も常に本から学んでおり、本に囲まれる幸せを感じながら暮らしています。本は、大切な文化です。そして木之本は独特な地域文化に育まれた素晴らしい町です。ここをしっかりと守り、次世代につないでいきたいとおられる久保寺さんの思いに共感しました。まだ、訪れたことのない方は、是非とも足をお運びください。

久保寺 容子

1963年長浜市生まれ。民間企業に就職後、公立図書館及び博物館に勤務。その後、民間企業で働きながら、2016年木之本北国街道沿いに古書店「あいたくて書房」をオープン。2021年6月、公益財団法人江北図書館の理事に就任。同年10月、同館の館長に就任。現在に至る。(なお、古書店は2024年に閉店)

知識、体験、嗜好などによって世界は一人一人違って見えている —淡海の夢2025風景展と永江弘之退任記念展に向けて

永江 弘之 [近江学研究所 研究員/成安造形大学 教授]

私にとって風景は、大学生の頃から制作テーマでした。一貫して自分の目に映る世界を自分自身で確認するとともにその魅力が他者に伝わるように表現する方法として絵や写真を続けてきました。

「世界の見え方は一人一人違う。同じものを見ているものも見えるものは違う」と常々考えています。きっかけは小学2年生から眼鏡をかけていたことかな。裸眼のピントのぼやけた風景と眼鏡ではっきり見える風景、2つの世界がどちらも私にとってはリアルな実像でした。その頃から「もし誰かの意識に入り込んでその人の目で見るのができたら世界はどう見えるのだろうか」と、他者の主観的な風景について妄想していました。

「見えているものが違う」というのは、視力など見え方だけではなく「着目するところが違う。認識しているものが違う」ということです。「車好きで車種や年式がわかる人と建築に詳しい人とでは町の同じ風景が全然違った景色に見えるのではないかな。雨が好きな人と嫌いな人では雨の日の見え方は全然違うのではないかな」ということです。

知識、経験、興味関心、嗜好などによって、一人一人に見えている世界が違えば、目の前の風景の魅力も「自分だけに見えて感じた魅力」です。だとすると「その魅力を



「淡海の夢 写生会」鑑賞会の様子

絵に描く」という行為には大きな意味があります。自分が描かなければ一期一会のその素敵な魅力は誰にも伝わらないのですから。

魅力を共感できる絵は他者の心に響き美意識や価値観を変える力があります。鑑賞者が今まで気づかなかった何気ない風景の魅力を意識し、暮らしの中で自ずと感じとれるようになるのです。

近江学講座などを通して近江の歴史や文化を知り地域に関心を持つことで、行ってみよう、見てみよう、描いてみよう・・・世界の見え方がより豊かで素敵なものになるでしょう。

「淡海の夢」企画では、町歩きをして自分で見つけた景色の魅力表現する写生会や、『他者の視点で見た魅力』を鑑賞し共感する風景展などを通して、多くの人がある近江の素晴らしい魅力・価値を感じ取り、このかけがえのない風景が次世代に引き継がれ、また、魅力的だと感じられる新たな風景が生み出されることを願っています。

本学「キャンパスが美術館」で11月25日～12月6日に開催予定の「淡海の夢風景展」は本年度で22回目です。今年度は筆者の退任記念展も同時開催予定です。一期一会の風景の魅力をどうぞお楽しみください。



一人一人が見つけた風景の魅力をスケッチ

「堅田駅西口広場」

三宅 正浩 「近江学研究所 研究員／成安造形大学 教授」

2019年の秋に完成し、2020年から本格的に利用されているJR堅田駅西口広場。堅田駅西側エリアの土地区画整理事業の一環で整備された。一般的に「駅前広場」というとバスやタクシーのロータリーがあり、広場とは名ばかりの通過動線であることがほとんどであるが、この堅田駅西口広場は待合スペースや桜並木沿いに様々な高さのベンチが用意され、公園の如く居場所が点在している気持ちの良い空間である。実はこの駅前広場のデザインには成安造形大学が深く関わっている。

2016年に大津市より「地域らしさのある駅前広場にしてほしい」という近隣住民からの要望を受けて、デザインについての協力要請があった。早速学生たちとプロジェクトチームを組み、地域についてのリサーチを経て、近隣住民に4つのデザイン案をプレゼンテーションした。もっとも評価の高かった案をベースに、琵琶湖の水面のゆらめきや比叡山系の山並みを湾曲した格子天井で表現し、地域に古くから残る古建築の二段垂木をイメージした格子天井や長押を利用した照明デザインが決まった。また天井や壁の格子に使用されている杉材は地元の比叡山や比良山系で採れたびわ湖材である。さらに完成した歩廊に設置された長押には、地域の子供たちがデザインした六葉（釘隠し）装飾を取り付け、多くの方々に愛される駅前広場となっている。駅のプラットホームから全体を見下ろすと、比良山系の山々との呼応が感じられるが、駅を降りて駅前広場を地域のリビングとしてくつろいでみるのもおすすめである。



学生によるプレゼンテーションの様子



六葉のデザインを考えるワークショップ



完成した六葉

比叡山摩訶不思議伝説ウォーク スタンプラリー2025 に関わって

加藤 賢治 [近江学研究所 副所長／成安造形大学 教授]

比叡山とその麓は、摩訶不思議な伝説の宝庫であるといえます。なぜならこの場所は、平安時代以降、どの時代においても歴史の舞台となり、著名な歴史上の人物が行き交い、そこで起こった出来事がそこに暮らす人々によって語り伝えられてきたからです。

比叡山延暦寺では、その貴重な伝説の場所を巡るスタンプラリーが開催されており、本学に新たなラリーポイントの看板制作(イラスト制作)の依頼がありました。追加された新たな伝説「将門岩」「蟻ヶ滝」「蕎麦喰い木像」の3つを情報デザイン領域3年生の中村明日香さんが担当することになりました。平将門、藤原秀郷、最澄、親鸞などが登場する興味深い伝説です。早速、近江の伝説を自身の研究テーマとしている私、加藤と延暦寺の僧侶の方、中村さんで現地を訪ね、体感するところから始めました。同時に本学教員や学外の妖怪研究の先生にアドバイスをいただき、素晴



らしいイラストが完成しました。また比叡山からは、伝説の英語訳もお願いしたいという依頼もあり、本学准教授の深尾ジャネットメイ先生に担当いただきました。現在、Webサイトで英文の伝説が紹介されています。

伝説には、歴史的事実のみでは伝えきれない、人間の複雑な情念が含まれています。なぜこのような摩訶不思議な伝説が伝わってきたのか。ぜひ、その場所に立ってその時代を追体験してみてください。



共につくる近江の未来へ—地域と歩む実践型研究

田口 真太郎 [近江学研究所 研究員 / 成安造形大学 講師 / 未来社会デザイン共創機構 研究員]

地域資源を“生かし、つなぐ”まちづくりの現場から

本学「未来社会デザイン共創機構」に所属し、現在は大学と地域社会の間をつなぎながら、文化資源を活かしたまちづくりや教育プログラムの開発に取り組んでいます。2024年度より近江学研究所の研究員として活動を始め、3年にわたる「惣・座・講」研究プロジェクトの最終年である本年は「講—つながりのコミュニティ」をテーマに、現代における新たな“講”のかたちを探究しています。

これまで近江各地で、現場に根ざした実践活動を続けてきました。たとえば近江八幡市では、官民共同出資のまちづくり会社でマネージャーを務め、地域固有の文化資源を活かした持続可能なまちづくりに携わりました。代表的な事例として、国の重要文化的景観「近江八幡の水郷」の保全と活用があります。ヨシ原や内湖といった自然環境を観光や環境教育と結びつけ、地域の暮らしと未来に継承するための仕組みを構築しました。

また、国選択無形民俗文化財「近江八幡の火まつり」では、各郷が奉納する10メートルを超える巨大な松明の製作と奉火が行われます。こうした伝統的なつながりや手仕事の継承にも関わり、文化がコミュニティを形成する力を実感しました。さらに、旧市街地の空き町家の利活用にも取り組み、重要伝統的建造物群保存地区を含む町並みの中で、活動拠点や商いの場としての再生を支援してきました。

「講」の可能性をいま再び—文化・教育・産業をつなぐ

文化誌『近江学』第16号「座—なりわいのコミュニティ」で紹介した信楽地域では、空き家・空き工場を活用したエリアマネジメントや、地元窯元と連携した賑わいづくり事業にも携わっています。地域の資源と人を活かし、来訪者や関係人口を呼び込む取り組みを進めています。

また、大学のプロジェクトとして、地域企業と連携した商品開発にも取り組んでいます。2024年度には、たねやと成安造形大学が協働し、「近江八景」をテーマに学生と社員がフィールドワークから試作、販売までを共に行う企画を実施しました。“つくる”と“届ける”という視点を学び、学生が地域と関わる実感を得ていく姿が印象的でした。

今後は、近江学研究所での活動を通じて、互助の仕組みや価値観を共有する場といった“講”的つながりを再発見し、実践と研究の両面から紡ぎ直していきたいと考えています。



官民連携で進めた地方創生のワークショップ



近江八幡の火まつりを支える松明づくりの継承活動



たねや×成安造形大学「近江八景プロジェクト」(学生と企業のグループワーク風景)



たねや×成安造形大学「近江八景プロジェクト」(記者発表の様子)

Information

近江学研究所では、今年度新たな試みとして、YouTubeにて「近江学ラジオ」の配信を開始いたしました。是非ご視聴ください。今後も情報発信にますます注力していきますので、さまざまなコンテンツで近江学をお楽しみください。

発行日：2025年10月1日

編集・発行：成安造形大学附属近江学研究所  成安造形大学 []
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
TEL.077-574-2118 FAX.077-574-2120
E-mail: omigaku@seian.ac.jp URL: <https://omigaku.org/>

附属近江学研究所の最新情報は
こちらのポータルサイトから
ご確認ください



<https://portal.omigaku.org/>